

長野県植物研究会 2012 年度大会及び 201 回例会の報告

大塚 孝一 *

2012 年度大会及び例会が、6 月 9 日～10 日の二日間で行われた。大会参加者は 39 名、例会参加者は 32 名でした。担当幹事：大塚孝一。

1 日時 平成 24 年 6 月 9 日(土) 午後～10 日(日)

2 場所 6 月 9 日(土)：

長野市飯綱 県環境保全研究所飯綱庁舎

6 月 10 日(日)：

長野市戸隠 荒倉山尾倉沢周辺

平成 24 年 6 月 9 日(土)

平成 24 年度大会

12:30～ 受付

12:30～13:10 植物同定会

13:20～13:50 総会

14:00～14:40 特別講演 1

石沢 進氏(新津植物資料室・元新潟大教授)：

「ユキツバキの形態・生態・分布」

14:45～15:25 特別講演 2

渡辺隆一氏(信大教育学部教授)：

「なぜ植物の研究をするか」

休憩

15:40～17:00 一般講演(1 題 20 分)

1 中村千賀(戸隠地質化石博物館)：

戸隠の植物について

2 藤田淳一(環境アセスメントセンター)：

植物観察の視点Ⅱ

3 大塚孝一(環境保全研究所)：

長野県における暖温帯性ベニシダの分布

4 中山 洸(佐久市)：

信州の植物 スライド解説(5) 絶滅危惧種

宿泊・懇親会

長野市飯綱上ヶ屋 2471-79 「アゼリア」

電話：026-239-2522

平成 24 年 6 月 10 日(日)

第 201 回例会 9:00～14:00 頃まで

場所：長野市戸隠 荒倉山尾倉沢周辺

9:00 戸隠地質化石博物館に集合

大会開始前の植物標本同定会では、主として中山会長が同定者となり、また、参加者が得意な分類群について受け持ち、持ち寄られた標本の検討がなされました。中山会長のあいさつの後、総会にはいり、事務局の佐藤庶務幹事、島野会計幹事から事業報告、会計報告がなされました(写真 1・2)。

特別講演 1 では、石澤進先生が長年研究されてきたユキツバキの形態・生態・分布について発表されました。特別講演 2 では、少年時代には昆虫少年であった渡辺隆一先生が、虫をとおして自然を見、生態系を知り、自然保護にかかわり、植物季節に着目しながら森林生態学者として研究を続け、環境教育に取り組んだことなどを発表されました。一般講演では 3 題の発表と、中山会長のスライド上映があり



写真 1 植物同定会



写真 2 大会の様子

* 大塚孝一 〒380-0952 長野市宮沖 199-1

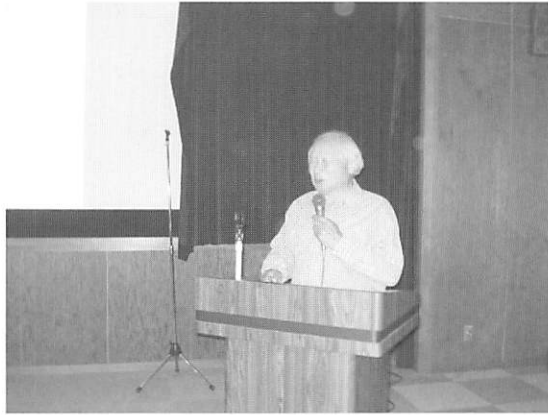


写真3 特別講演 石澤進先生



写真4 特別講演 渡辺隆一先生

ました。発表要旨の入手を希望される方は、大塚までご連絡ください。

石澤進先生は、ユキツバキについてヤブツバキと比べて、まず外部形態として樹形が低く、花は平開型で花糸は短く下部の合着部が短いこと、蕾が小さく、種子が大きいことなどをきれいな映像を使って説明されました。生態的には冬期寒風に遭遇すると枝葉が枯死し耐寒性が弱いこと、屈とう性や耐湿性が強いことを説明されました。分布については、日本海側に偏って分布し、冬期の降水量 200mm 以上、最深積雪量 150cm 以上、積雪期間がほぼ 3 ヶ月、5 月 20 日以降降霜がない地域に分布するとされました。ユキツバキは長野県でも新潟県境の地域には見ることができるので、みなさん興味深く聞いていました(写真3)。

渡辺隆一先生は、まず、苗場山の湿原保護と木道についてお話をされました。山岳への人の影響として、登山道沿いの人による踏み荒らしにより湿原が荒れている現状や、迂回による新しい登山道整備と木道の設置、湿原植生が回復しつつある現状などを紹介されました。また、研究対象としてきた樹木のフェノロジー調査について詳しく紹介されました。

特に千葉県清澄地域における木本植物の植物季節については、60 科 243 種の木本植物を対象として、マークした個体について開葉、黄葉、落葉、開花、結実などを観察し、葉については、落葉樹の開葉期は常緑樹よりも早く短期間であること、落葉樹の落葉期は、高木は低木より多少早いことなどを説明されました。また、開花・結実についての傾向は、つる性木本の開花期は他よりも遅いこと、高木の開花期は低木よりも早いこと、常緑樹の結実期落葉樹よりも遅いことなどを紹介してくれました。他にも、これまで多くの調査研究してきた内容などをお話頂きました(写真4)。

中村千賀氏は戸隠の植物について、「取り囲む 4 つの山のそれぞれの顔」として、4 つの地域の植物の概要について発表されました。まず 1 つ目の北側の飯綱山については、山頂付近はシラタマノキやゴゼンタチバナ、ネコシデなど亜高山植生となっていて、山を取り囲むように標高 1,000 m 付近に湧水がわいており、ため池や湿地が点在していること。また、ミズバショウやミツガシワが見られ、湿性林にはハンノキ・ヤチダモ、ハルニレ、ナニワズ、またニリンソウの群生などが見られ、この湧水の一部で 2010 年にヒンジモが確認されていることを話されました。2 つ目は北西側の戸隠山系で、およそ 500 万年前の海底火山の噴出物と海底の泥や砂・礫からなる層が急激な地殻変動で 2,000 m にまで隆起してできた山であること、尾根は狭くがれ場で擬高山的な景観であり、トガクシナズナやミヤママンネングサ、ミヤマムラサキなどの基準産地となっていることや、ツガザクラやハクサンイチゲなども見られることなど。3 つ目は西側の荒倉山系で、戸隠山と同じ由来をもつが、主峰砂鉢山で 1,430 m と一回り小ぶり、北側に戸隠連峰が控えているため、積雪は多くないこと、比較的太平洋側や県東部が分布の中心とされる、イワタバコ、ハナネコノメ、オオモミジが混じること、また、里山として薪炭林・採草地として利用されてきた経緯から、林内に細々とギンランやクルマユリが見られたり、尾根沿いの岩場にはミヤマハタザオやカワラヨモギ、ミツバベンケイ(コブクベンケイタイプ)が群生していることなどを話されました。4 つ目は南側の陣馬平山(1,258 m)で、松本から上田まで広がるかつての海岸平原が隆起した、約 700 ~ 800 m の大峰面の北端の一部にあたり、裾花川の浸食によって戸隠側は比較的急峻な地形となっていて、尾根近くまで集落や農地が点在しており、農地の土手や栗林の林床

などに春にはアズマイチゲの群落が随所にみられること、尾根沿いにはオオバボダイジュやオオバクロモジが見られること、これらの山々に囲まれた丘陵には農地が広がり、水田にはミズオオバコやサワトウガラシ、サンショウモ、畦畔にはオグルマ、サクラタデ、ヒナガヤツリなども見られることなど。戸隠地域は日本海側に位置しながら、飯綱山と戸隠山が雪雲の侵入を妨げているため、南北の降雪量の差が大きく、日本海側の多雪地域の特徴的とされる植物であっても、その分布の境は様々であること、トガクシソウ、シラネアオイ、エゾエンゴサク、チョウジギクなどは戸隠山の登山道 1,500 m 付近から見られ、ヒロハゴマギ、ホクリクネコノメは荒倉山系から、サワアザミは陣馬平から見られるとしました。明日の例会にも大変参考になる発表でした。

藤田淳一氏は、前回（2010 年大会）は植物の識別についての基本的な特徴のとりえ方について述べましたが、今回は「植物観察の視点Ⅱ」として、①同一種を複数の地域で見る、②その種の普遍的な特徴を把握する、③写真とメモと標本により、それぞれの種の特徴を浮き彫りにする、これらの方法について話をされました。コバノヒノキシダに注目し、普段知っている種を本当に知っているか、少しの違いが変異なのか別種なのかの判断が必要とされました。普段見ているその種の変異が、その地域のものだけなのか、その種全体の変異なのかを判断しないと、アオガネシダと誤同定しがちであることなどを話されました。植物を記録する方法として、メモと標本が大切であると述べられました。いろんな観点から、その植物を良く観察することが重要と思われました。

大塚孝一氏は、暖温帯性で常緑のベニシダについて長野県における分布状況を 2011 年 11 月から 2012 年 2 月にかけて、県内 100 箇所の神社林等における自生の有無、個体数等について調査し、47 箇所分布を確認したことを報告されました。2000 年に行った同じ調査では、ベニシダは従来長野県では県南の木曽中部以南と下伊那を中心に、また一部内陸部にも分布することが知られていたが、調査地 100 箇の内、43 箇所分布することを示し、そのうち 18 箇所は県の中北部であることを明らかにしました。約 10 年前の調査に比べ今回新たに 4 箇所が増え、その他の箇所でも個体数が増加し、分布が拡大していることを確認しました。ベニシダは地球温暖化に伴い長野県内でも分布を広げており、分布拡大をモニタリングする良い材料と考えられる

ことから、継続して分布状況を把握することとし、今後も分布状況のモニタリングを続けるとされました。（本研究会誌の報告参照）

中山冽会長からは、「信州の植物スライド解説 5」として、恒例になった植物解説をしていただきました。今回は、長野県版 RDB 掲載種について、次の 50 種の解説をしていただきました。いつもありがとうございます。

（絶滅危惧ⅠA類；CR）ヤマタバコ、イワニンジン、チチブミネバリ、ヒンジモ、ハコネコメツツジ、チシマヒョウタンボク、イワムラサキ、オカウツボ、タルマイスゲ、ニオイシダ、（絶滅危惧ⅠB類；EN）オオミスミソウ、ハイハマボス、デンジソウ、ナニワズ、タマガヤツリ、ヒメミズニラ、シナノカリヤスモドキ、オオイワインテン、ユキワリソウ、ヒメマツカサスキ、キヨスミウツボ、シナノアキギリ、カイフウロ、アギナシ、オオアカウキクサ、（絶滅危惧Ⅱ類；VU）ハクセンナズナ、カラフトイバラ、ヒメムヨウラン、ハナヒョウタンボク、ニシキソウ、ヒロハヌマガヤ、イワカラマツ、ツチアケビ、マルバウマノスズクサ、オオビランジ、ミクリ、サクラソウ、ノジトラノオ、タコノアシ、（準絶滅危惧種；NT）オニク、ゲンバイズル、ツメレンゲ、ノダイオウ、ヤマユリ、カイジンドウ、ヤエガワカンバ、カリガネソウ、ヤナギスブタ、キキョウ、（希少雑種；RH）リュウノウイワインテン。

（大会参加者）中山冽、佐藤利幸、島野光司、石澤進、朱雁、宮崎弘規、小口好久、篠原喜進、堀米富平、藤田淳一、笠原光枝、吉沢敏江、佐々木あや子、星山耕一、清水理恵、戸谷やよい、早坂祥彦、廣江伸作、廣江祐子、神林清文、佐藤稔、横井力、大塚孝一、蛭間啓（以上宿泊・懇親）、渡辺隆一、伊藤静夫、上野勝典、上野由貴枝、竹田正博、田中崇行、市川伸人、中村千賀、坂口竣弥、金子洋作、小澤ゆきえ、木畑かほる、井波明宏、渋沢けさ子、宮島陽子（39 名）。

翌日の例会は 9 時に戸隠地質化石博物館に集合し、当日参加者を加え集合写真を撮影後（写真 5）、車に相乗りして荒倉山尾倉沢入り口まで行きました。当日は、尾倉沢古道の会の方々も山頂を目指す行事があり、我々の駐車スペースを確保するため、かなり下に車を止めていただき大変な配慮をしてくださいました。駐車スペースから沢入り口まで

のほんの 100 ～ 200m の林道沿いをいつものようにゆっくり植物観察しながら進みました（写真6）。植物リスト作成と例会の詳細報告を藤田淳一氏と地元の中村千賀氏にお願いしました。昨晚の懇親会では島野先生と清水さんをご結婚するというおめでたい報告まで飛び出し、大塚は体調不良を忘れて飲んだため、当日は体調おもわしくなく、十分な案内もできずじまいで申し訳ありませんでした。幸い、藤田さんや中村さんが案内をしてくれましたし、遠路小林さんや堤さんが来ていただき、また、久しぶりに和田清先生も来られて、皆さん喜んでいらっしかったです。天気にも恵まれ、沢筋には多くの植物が

観察でき、北信の植物を堪能できたと思います（写真7）。当日観察できた植物のリスト等、中村さんと藤田さんに別立てで詳細な報告にまとめてもらいました（例会報告その2を参照）。

（第201回例会参加者）中山洸、佐藤利幸、島野光司、石澤進、朱雁、宮崎弘規、小口好久、篠原喜運、堀米富平、藤田淳一、笠原光枝、吉沢敏江、佐々木あや子、星山耕一、清水理恵、戸谷やよい、早坂祥彦、廣江伸作、廣江祐子、神林清文、佐藤稔、御堂島明、大塚孝一、蛭間啓、伊藤静夫、中村千賀、坂口竣弥、和田清、堤久、小林正明、井浦和子、宮島陽子（32名）。



写真5 集合写真



写真6 観察会の様子



写真7 今日のまとめ